

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372400988		
法人名	医療法人 安田会		
事業所名	グループホーム るしだ		
所在地	熊本県玉名市横島町横島3399-1		
自己評価作成日	令和4年2月7日	評価結果市町村受理日	令和4年4月1日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和4年3月1日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当法人は地域に貢献するという想いで介護事業をスタートし、グループホームもその一環である。特別養護老人ホームに入所するほど重度化はしていないが、認知症のため自宅で暮らすのが困難な方を受け入れている。家族は認知症高齢者が自宅にいと、心配で目が離せず高齢者の行動も制限してしまう。るしだに入居することで、高齢者は自分の習慣や特技等まだできることを職員がサポートし、家族はいつでも気軽に会いに行ける。こうした事業により地域住民の暮らしを支えることができるよう努力している。しかし、新型コロナウイルス感染予防のため、現在は様々な制限を行っており、面会も規制中だが、地域の感染状況に応じて、全面ガラスの玄関ドアを利用し、ガラス越しによる面会を行う等柔軟に対応している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

これまでの地域の中で充実した生活がコロナ禍により一変しているが、最高齢97歳の入居者も独歩での生活や、玄関内外の掃除を役割としたり、中庭を活用した野菜作り等高齢化する中でも残存機能維持が生活にメリハリとなり充実した生活を送る入居者や、自分の意思のままに過ごされる姿に、職員の笑顔でのケアの成果が表出している。外出にも制限があるが、三社参りへの外出が「また行きたい」と入居者の思いを引き出す等今できる限りの支援に努めている。施設長・管理者を中心とした風通りの良い環境はアイデアも豊富で有り、学習会により認知症ケアを更に深め、業務の見直し等に全員で検証する体制としている。医療との連携、家族との関係も構築し、毎日の検温、週1回のSPO2の検測を受診するパロメーターとする等これまで以上に健康管理を徹底してコロナ禍を乗り切り、『たのしく ケアさん と るしだで たのしく』と入居者が七夕に託した思いをまさに実践するホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営				
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	コロナ禍のため地域密着らしいことができなくなった。家族との面会は感染者が落ち着いた時にのみ窓越しで行っているが、地域への活動は社会の情勢を見ながら慎重に考えたい。	ホームを地域の中の住宅の一つとして捉えたホームは、これまでの充実した地域の中での生活はコロナ感染症予防の観点から一変している。その中で、基本理念として謳う『入居者の尊厳を守り、家庭的で明るい環境の提供』として、中庭を活用した野菜の育成を楽しみ、玄関先の掃除等家事活動を継続される入居者や、職員の得意分野を發揮した日常、入居者と職員との夜更かし等に理念の実践である事が表われている。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	運営推進会議や認知症キャラバンメイトの活動を通して、地域の認知症応援団や民生委員等との交流を深めるよう努めている。	区費や消防団への寄付等の継続や地域から寄せられる広報誌等も地域の情報情報のリサーチとして生かされている、キャラバンメイトや認知症応援団としての活動等が功を奏し、認知症の方への関わり方を知りたいとの民生委員からの声も挙がっている。入居者の外出には行動制限もあり、中庭等の散歩を支援している。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の小学校等に認知症サポーター養成講座のサポートに行っていたが、コロナ禍ため現在は自粛している。しかし、認知症キャラバンメイトの活動はリモート会議により継続しており、地域での勉強会等は常に企画している。	
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍のため事業所では開催せず書面会議として継続しており、入居者の活動や事業所の行事等の報告を行っている。事業所内での家族の面会を許可した時点で、本来の会議も再開する予定である。	運営推進会議は書面審議として事業所の状況や行事・活動、事故・ヒヤリハット、身体拘束等について詳細に記載し、行政・地域包括支援センター、認知症応援団、民生委員、入居者及び家族代表等を構成メンバーとして書面を郵送している。
				行政からは報告書の提出後に連絡が入っている。行政や地域委員からの意見や情報を得る唯一の手段でもあり、今後も多方面からの意見の収集の工夫により、サービスに反映されることと期待したい。例えば、意見書を同封する等検討頂きたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議や介護保険事業所の指定更新等、市町村担当者とは重要なやり取りがいくつもあるが、いつも丁寧に対応してもらっている。	運営推進会議書面提出後の連絡の他、指定更新時の相談等に適切なアドバイスを得ている。地域包括支援センターからは民生委員の認知症に対する講師を依頼される等協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人全体で毎月勉強会を企画しており、身体拘束についても毎年必ず年間計画に入れている。	法人での身体拘束廃止委員会主催の勉強会や事例検討により意識を強化させている。職員のつい出してしまう「ちょっと待って」には説明の仕方を共有し、年2回虐待の芽チェックリストにより個々が振り返っている。入居者の転倒事例により歩行状況をながらの足元センサーの利用、夜間のトイレ対応等個別に把握し、居室の入り口の鈴等を転倒防止対策としている。車椅子も安易に使用せず、車椅子(家族が用意)から歩行用バギー車へ変更される等職員の気づき・観察力が改善へ繋げている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内に身体拘束適正化委員会があり、年に2回「虐待の芽チェックリスト」を全職員に配布し、虐待に対する意識づけを行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在対象者がいないため職員への勉強会は行っていないが、成年後見制度が必要な場合相談に応じ、顧問弁護士への依頼も可能となっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	コロナ禍のため家族会を実施できず、報酬改定の説明は不十分になりがちだが、文書による通知や毎月の支払い時に個別に質問に応じることのできるため、理解を図るよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	職員と家族が個別に話す機会は常にあるが、本来なら年に一度家族会を実施し、家族からの意見を聞く機会を作っていた。ここ2年間は面会制限中であり、外部者を招待する行事も全て中止している。	家族の訪問時(窓越し面会時等)に状況を説明するとともに、担当職員が衣替えや備品の不足等を連絡する等面会も制限があるなかで家族の不安軽減に努めている。また、電話時に気になること等を聞き取りしている。個人毎に便りを発行し、キーパーソン以外の家族にも配布している。	家族会等も開催出来る状況には無いが、コロナ感染症に目処が付いた折には、家族との交流会や家族会の開催ができることを期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1度の定例会議に出席し、職員の要望を聞いて、運営について話し合いを行っている。	定例会議により一ヶ月間の反省と次月の計画や入院からの受入れ等を話し合い、全体会としてズームで参加した内容を報告し情報を共有している。業務時間の調整や業務の見直し等作成し内容を全員で検討する等合議により何事も決定する体制としている。施設長を中心として管理者等の変動も無く、風通りの良い環境が作られている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	賞与や介護職員処遇改善交付金では職員が最大限受け取れるよう努めている。コロナ禍では全職員にマスクを支給したり、職場でPCR検査をできるようにしたり、支援を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	月に2回訪れる外部講師が職員と管理者の育成に関わっており、管理者は常に課題が与えられている。全職員対象の勉強会では、ZOOMを利用することで、休日の職員や現場を離れられない職員も参加できる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域のグループホームと地域密着型サービス連絡会により交流していたが、コロナ禍のため活動を中止している。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前に本人や家族、ケアマネージャーからしっかり情報収集を行い、本人がホームで何ができるかを把握する。職員は笑顔で自己紹介し、自然な会話の中で、様々な要望を聞き出す。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族には定期的な面会をお願いし、その際職員が日常会話の中から、家族の想いを上手に聞き出す。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	契約の段階で本人の嗜好等を調査し、入居後も継続して楽しめるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員はあえて制服を着用せず私服に近い服装にする等、利用者と介護士の関係ではなく、共同生活の同居人という雰囲気を作るよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍のため地域の感染状況が減った時に、ガラス越しの面会を行っている。ターミナル期の入居者の場合、非常口に隣接した居室に移動してもらい、家族が正面玄関を通らず特別に面会できるよう配慮している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	可能な限りガラス越しの面会に努めているが、外出は極力制限している。携帯電話を持っている入居者は、電話を使いスムーズに会話ができる。	コロナ感染症を見ながら家族の協力により自宅での仏壇参りに出かけた入居者や、初詣として三社参りを支援している。また近くの床屋に出かけた方や、訪問理容等馴染みの関係を継続させている。敬老会にはおはぎを作る等今できる支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者それぞれの相性を配慮し、リビングのテーブルや食卓での席順を決めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	骨折後、母体の老健施設でリハビリ中の方もいて、施設間で情報を共有できるため、条件を満たせば再度入居できる仕組みがある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の様子や日頃の訴えから想いを把握できるよう努めている。ターミナル期を迎えた方には、亡くなる前に一度自宅への外出を許可した。短時間だが最後に家で過ごし、飼い犬にも会うことができた。	日々の生活の中で食べたいもの等を聞き取りしたり、野菜を見ながら何にするか相談し、料理の下拵えを一緒に行くと会話も弾み、希望が出されている。意思疎通や発語困難な状況の入居者には表情や行動等で推察し、笑顔もバロメーターの一つとしてする。終末期ケアのなかで、自宅への外出を支援する等個別の思いに応えている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人との会話や家族への聞き取りの中から把握するよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の記録や日誌等を活用し、個々の状態が把握できるような体制を作っている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	前年度から計画作成担当者を増員した。また、併設施設のリハ専門職の協力により生活機能向上連携加算を取得することで、より質の高い計画作成ができています。	ケース記録の中に職員の気付き等の特記事項として残し、リハビリ専門職員からの評価や歩行状態によってはPTと相談している。課題整理総括表を生かしながら、3ヶ月毎の評価、半年毎には再作成している。また、区分変更時及び更新時の見直し等現状に即した個別的なプランが作成されている。家族にはプランを見ながら説明し、同意を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	法人で共通のPCソフトを導入しており、PCやipadで記録できるため、記録が管理しやすく情報共有も従来より容易になっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	新型コロナウイルスワクチン接種では、入居直後の方に母体施設で余ったワクチンを接種したり、併設の診療所に副反応のための待機時間のお世話を頼む等、柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で外出が難しいが、理容室は極力事業所でカットしてもらう中、地域の感染者が少ない時にはお店に出向いたり柔軟に対応してもらっている。また初詣や花見等季節のドライブは、感染に注意し、慎重に行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医との連携を密にとりながら、他の医療機関には家族の協力を得て受診できている。	入居時にかかりつけ医について説明しており、入居前からのかかりつけ医への受診は家族へお願いしている。母体医療機関をかかりつけ医とされる方が殆どであり、受診前に空き状況を確認し徒歩や車椅子で出かけている。また、専門医(眼科等)には家族が同行されており、医療・家族との連携を図りながら適切な医療を支援している。更に、毎日の検温、週1回のSPO2の検測を受診するバロメーターとして異常の早期発見に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同一敷地内になる併設施設看護師と協力関係を結んでいる。法人内で介護ソフトがネットワークでつながっており、看護師は自分の職場から常にグループホームの入居者の記録を確認することもできる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	電話で経過状況の確認を行い、病院側、家族との調整をしている。また、病院のカンファレンスに家族と共に出席する等の連携も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族の意向を確認しながら、医療面の負担の少ない自然な看取りに対して、可能な範囲で支援を行う。重度化の状態に応じて、他施設への転居も勧める。	入居時にリスク説明と共に、重度化や看取り支援についてホームの方針を伝えている。医療行為を積極的にしないケアを基本として出来る支援に努め、納得の得られた家族との合意により終末期ケアに取り組んでいる。支援に当り、状態を見ながら話し合いを重ね、コロナ感染症の状況を考慮して部屋移動を行い、窓越しからでも家族が入居者の顔を見られるように配慮している。	職員からは、コロナ禍の中「十分な事ができるだろうか」と心配する声も挙がっていたが、自宅へ一時帰宅たれたり、最後まで歩行が出来ていたことを喜び、最期の支援が出来たことに感謝している。今後も、関係者と連携し、終末期支援に取り組まれることが期待される。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	例年、年末に消防署の指導の下で応急手当訓練を行っていたが、現在コロナ禍のため中止している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の消防訓練と年1回の水害訓練を行っている。本来は運営推進会議で消防訓練を行い地域の方に参加してもらう予定だったが、コロナ禍のためできなかった。	水害訓練の義務化に伴い、法人の合同訓練に参加し、入居者を徒歩や車いすで誘導しながら、隣接施設への垂直避難を体験している。台風等予測が付く場合には事前にパンや麺類などを用意するとともに、備蓄として米を含め食品を多めに常備している。	コロナ禍以前には、運営推進会議を利用し地域関係者とともに火災訓練が行われており、今後も機会があれば実現されることが期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	法人内の挨拶接遇委員会が行う定期的な自己評価により、言葉遣い、呼び方、身だしなみ、勤務態度等を各職員が自分を見つめ直しチェックしている。	法人の接遇委員会が実施するアンケートで、言葉使いや身だしなみ等についての自己評価を振り返りの機会としている。入居者の呼称は苗字や下の名前で呼ばれる事で喜ばれる等反応がいいようである。個人情報保護について、書類管理や写真撮影等には十分は注意を払っている。	ホームでは、職員同士の馴染みの関係性が出来上がっているが、親しいがゆえにお互いを苗字以外で呼びあう場面があるとして、個々に注意していきたいとしている。また、守秘義務については、誓約書を交わすことを検討頂きたい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	できる限り、個人で選択できる場面を持ち、意見が取り組めるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	重度の方と軽度の方の支援の両立に職員も悩む中、個々のペースで過ごしてもらおうよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	整容には、好みの服を選択できるように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	台所に立つのが難しくても、もやしの根切り、いりこの頭とり等簡単な作業ならできる方もいるので、職員が上手にお願いしている。	職員は入居者の希望や食べやすいものを取り入れながら、手作りの食事を提供している。現在は買物同行も難しく、入居者に食材や野菜を見てもらい、食への期待感を引き出すように工夫している。また、料理によっては食形態を変える等なるべく形状を残した提供している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	チェック表をもとに、状況に応じて量や形態を変更しながらバランスのとれた栄養確保に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	個人に合わせた口腔ケア、義歯洗浄を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	チェック表により排泄パターンの理解に努めている。	チェック表により排泄の間隔を把握し、動作や表情から察知しながらトイレへの声かけ、誘導を行っている。自分でトイレへ行かれる方にも失敗が無かったか等さりげなく確認している。リハビリパンツに尿取りパットを使用する入居者には時間帯や個々に使い分け、家族の負担軽減に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の確認を毎日行っている。食事には季節の野菜や果物を取り入れ、固めの食材については、調理の仕方も工夫している。飲み物も状況に応じ、種類を選んでもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	各入居者の入浴の曜日を設定しているが、その時の状況に応じて臨機応変に対応している。	浴室には個浴と2・3人が入れる大型の浴槽を備え、立位が難しい方にはかけ湯をしながらシャワーで対応している。日曜日以外の週2回を入浴日として、職員と1対1で午後から入浴を支援している。中には自分で着替えを準備したり、拒否をされる方も浴槽に入れば喜ばれるとの事である。菖蒲や柚等を使用しながら季節を楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個人の生活パターンの中で状況に応じて、または希望時に休息できるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服の変更や本人の状態に変化があれば、記録を通して観察を強化している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	外出制限のため楽しみの確保が困難であるが、季節毎のドライブや事業所に屋台のラーメン屋を呼ぶ等、できることを企画している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	正月は地域の感染者が少なかったため細心の注意を払い三社参りに出かけたが、日常生活ではコロナ禍のため外出を制限している。運動不足やストレスがたまるまいように広い庭園を利用した散歩を日課にしようよう配慮している。	感染症の推移を見ながら、三社参りに出かけた時、母体の外来受診も外出の一つとして支援している。入居者はリビングホール前の広々とした中庭での散歩や菜園の野菜の育ち具合を見たり、収穫に関わる等外気に触れながらコロナ禍を乗り切っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の協力を得ながら、お金を所持する入居者もいる。事業所内でのヤクルトの購入など、可能な方には自分で財布からお金を出して払うところまでやってもらうよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙は、自由に利用できるよう支援している。携帯電話の方も、個別に着信対応の支援も行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	天井が高く窓が大きいので、太陽の光が日中を通して建物の中に入ってくるため、心地よくリビングで過ごすことができる。	職員は共有空間の掃除や消毒、換気等感染対策を徹底している。高い天井は圧迫感もなく、密にならないように入居者が集まり、雑談や塗り絵、手作りカレンダーの制作に参加しながら過されている。夜間帯は、寝付かれない入居者とテレビを見たり、談笑する場所としてホールを活用している。また、玄関の掃除を役割として取組む入居者の姿もあり、張り合いのある日常を見ることが出来るホームである。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	広いリビングの各所にイスやベンチが設置されており、入居者同士で気まずい雰囲気になった時等職員が上手に距離をとるように配慮できる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホームとしては最小限の設備を用意するだけで、契約時に本人の馴染みのあるものを持ち込んでほしい旨を伝えている。	入居に当たり、使いなれた物の必要性を説明し、馴染みの筆筒や椅子や寝具はこれまで使われていた物を持参してもらうよう依頼している。居室には日用品や家族写真、ホームでの行事写真等を飾り、家族が居室に入ることが出来ない現在は、担当職員が筆筒を確認しながら、不足の衣類等家族に連絡を入れる等家族と担当職員とのコミュニケーションを図るながら、生活環境を整えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居者の状況によって、居室に大きく名前を貼ったり、トイレに目印をつけたり、できるだけ自分で判断して生活ができるよう支援している。		